

A・スミスにおける労働の二重性把握

——労働の二重性の発見史によせて——

明 石 博 行

はじめに

マルクスによれば、商品に含まれている労働の二面的性格の把握は、「経済学の理解にとっての決定的跳躍点」([10], 56頁)⁽¹⁾である。そして、「商品を二重の形態の労働に分析すること、使用価値を現実的労働または合目的生産活動に、交換価値を労働時間または同等な社会的労働に分析することは、イギリスではウィリアム・ペティに、フランスではボアギュベールに始まり、イギリスではリカードに、フランスではシスモンディに終わる古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的最終成果である」([8], 36頁)。

労働の二重性の把握は、経済学説史上このような基軸的な意味をもっている。したがって、労働の二重性の発見史について研究し、この二重性がいかなる経緯をへて発見され、マルクスがその先行者の把握に比して何を深化させたのかを究明することは、経済学説史の研究としてだけでも意義をもつであろう。またその研究は、旧知の論争問題であるマルクスの労働の二重性・抽象的人間労働規定それ自体を究明するうえでも意義をもつであろう。さらにそれは、古典派やマルクスの労働価値説の理論構造を明らかにし、労働価値説をさらに深化させていくための基礎作業としても意義をもつであろう。

それゆえ私は、そのような研究の一環として、A・スミスの労働の二重性把握についてここで検討してみようと思う。スミスの把握には独得の構造があり、その到達点は彼以降の古典派経済学の到達点を大枠において制約したといえる。しかし、質の高さを誇るわが国のスミス研究にあっても、その独得の構造は充分究明されていないように思われるのであり、その到達点についても評

価は必ずしも一致していない⁽²⁾。そこで以下、スミスの労働の二重性把握について検討し、彼の把握の独得の構造と到達点について明らかにしてみたい。

(注)

(1) 以下の研究においては、引用文献を番号で示し、『諸国民の富』からの引用は文献番号を省略する。文献が分冊にわかれている場合は、ことわりがないかぎり、第一分冊または上巻である。なお、訳文は必ずしも訳書とは一致しない。

(2) マルクスは、労働の二重性を古典派経済学は「明文と明瞭な意識性をもっては区別していない」([10], 107頁)が、「事実上は(tatsächlich)区別している」(同頁)と評した。この評価は広くうけ入れられており、スミスが労働の二重性を事実上区別したという認識は一般化している。しかし、より詳しく検討してみると評価は一定していない。例えば一方で、「富を創造する活動のすべての規定性を抛棄して、いわゆる『抽象的・人間的労働』を労働一般として発見しえたものは、アダム・スミスである」([17], 28頁)という評価もあれば、他方では、スミスは「すべての労働の単純な無差別性が実は千差万別の具体的労働の不等性の捨象の規定においてのみ実存するという理解を欠き、それがために抽象的人間労働を具体的有用労働から概念的に峻別して析出することにもろくも失敗した」([20], 93頁)という評価もあり、対立した見解がみられるのである。

一、スミスの具体的有用労働把握

まず問題となるのは、スミスが具体的有用労働をどのように把握したかの究明であり、評価である⁽¹⁾。この問題は種々の論点を内に含んでいる。それゆえ、これをつぎのような諸点にわけて検討する。すなわち、(一)、彼の具体的有用労働把握の到達点、その接近度と限界について、(二)、先行者の学説・思想との対比における彼の把握の位置および意義について、(三)、価値形成労働・抽象的人間労働との対比における彼の具体的有用労働把握の特質について、の三論点がそれである。

第一の、スミスの把握の到達点については、具体的有用労働を彼はある程度把握しているが、そこには重大な限界が存在しているということを理解しておかねばならない。

確かに彼は、生活必需品・便益品を本源的に供給する「資源(fund)」として労働をとらえた点において、また、「有用労働(useful labour)」という規定

を用い、有用な物あるいは効果をつくりだす労働をとらえた点において、具体的有用労働をある程度把握している。例えば、『諸国民の富』の冒頭において、彼はつぎのように述べている。「あらゆる国民の年々の労働は、その国民が年々消費するいっさいの生活必需品と便益品を本源的に供給する資源であり、この必需品と便益品はつねにその労働の生産物か、またはその生産物で他の諸国民から購買されたものかのいずれかである」(89頁)。つまり彼は、労働をまず諸使用価値の・素材的富の源泉という規定性においてとらえたのである。このような労働の理解において、彼が具体的有用労働をある程度把握していることはいうまでもない。また、「有用労働」という規定についていえば、これは有用な物・効果をつくりだす労働をすべて包摂するものであり、価値形成労働とは一応区別されるものである。「有用労働」とはまず、「社会の実質的富のあらゆる増加、つまりそこで使用される有用労働のあらゆる増加」(Ⅱ, 216頁)という表現にみられるように、使用価値形成労働を意味するカテゴリーである。さらにこのカテゴリーは、「聖職者・法律家・医師・あらゆる種類の文士・俳優・道化師・音楽家・オペラ歌手・オペラの踊り手等々」(同, 229頁)のなかで「もっとも有用な労働でも、あとになってから等量の労働を購買したり獲得しうるなにもものをも生産しない」(同, 340頁)という表現にみられるように、サービス労働をも包摂している。そしてこれは、サービス労働を包摂している点で、「価値を生産する」(同, 337頁)労働つまり価値形成労働とは区別されるものなのである。スミスがこのような形で、使用価値形成労働としての、価値形成労働とは一応区別される「有用労働」をとらえたという点でも、彼が具体的有用労働をある程度把握していることは明らかであろう⁽²⁾。

しかし、厳密にみるならば、そこには重大な限界が存在していることがわかる。注目すべき点は二つある。一つは、彼が諸使用価値の源泉としての労働一般を無規定・無差別の労働一般としてとらえ、具体的有用労働の特質である特殊性と合目的性を把握していないという点である。さきにみた『諸国民の富』の冒頭における素材的な富の源泉としての労働が、特定の規定性をもたない労働一般であることは容易にみてとれる。分業を導入したのちでも彼は、マルクスの言葉を借りるならば、「分業としての労働一般」([8], 43頁)を素材的な

富の源泉としてとらえるのであって、やはり労働を一般的にしか把握していないのである。もちろん彼は、「二つの異なる労働量のあいだの割合を確定することはしばしば困難である」(152—153頁) という規定にみられるように、労働が種々異なったものであることは知っている。しかし、相異なるさまざまな労働が存在するなどということは、誰もがもっている労働の一般的表象にすぎない。彼の把握はそのような一般的表象の域にとどまっているのであり、『諸国民の富』のなかに使用価値形成労働・「有用労働」の特殊性・合目的性について明示的に述べた箇所を見出すことはできない。総じて彼は、具体的有用労働の特質をなす特殊性と合目的性を把握しなかったのである⁽³⁾。もう一つは、彼が素材的富の源泉としての労働一般をとらえたとき、その労働は自然的素材と結びついて使用価値を形成すること、使用価値の形成には労働手段や労働対象が必要であることを忘れてしまった点である⁽⁴⁾。『諸国民の富』の冒頭の規定には、このような彼の把握の欠陥が明瞭に現われている。もちろん、彼がつねに自然的素材等々を忘れていたわけではない。彼は、「土地および労働の年々の生産物」という規定を多用しており、自然を考慮している。彼は、「栽培や耕作は、しばしば自然の能動的な多産性を活発化させるというよりはむしろそれを規制するものなのであり、しかもあらゆる労働を加えたところで、その仕事の大部分はつねに自然によってなしとげられるべきものとして残る」(同, 396頁)、「地代は人間の所産とみなしうるあらゆる物をさしひき、またはそれをつぐなってなおそのあとに残るところの自然の所産である」(同, 367頁)と述べるなど、自然の生産力を強調し、重農主義的見解にたちもどってさえているのである。また、「同数の労働者の生産諸力は、労働を促進したり短縮したりするもろもろの機械や道具を多少とも増加させ改善するか、または仕事をいっそう適切に分割・配分するかのいずれかの結果でなければ増加しえない」(Ⅱ, 361頁)という規定や、第二篇第一章等々での固定資本としての労働手段への言及などにみられるように、彼は労働手段を考慮している。さらに、原料や労働を加える特定の対象について随所でふれており、労働対象を無視しているわけでもない。しかし彼は、「製造業においては自然はなにごとくもせず、人間がいっさいのことをなす」(同, 39頁) という誤った把握に影響されてのこと

であろうが、しばしば自然的素材を無視している。そして、すでにみた冒頭での規定のように、ときに生産手段を無視する形で、富つまり使用価値の源泉を労働に求めるのである。彼は、具体的有用労働は自然的素材と結合して使用価値を形成するのだということ、それは労働手段を用いて労働対象の変化をひき起こすのだということを明確には把握しなかったのである⁶⁾。

以上のことからして、スミスはある程度具体的有用労働を把握したが、厳密にみるならば、そこには重大な限界が存在しており、その完全な把握に彼は到達しなかったと結論することができる。

第二に、先行者の学説・思想と対比してみるならば、つぎのことがいえる。

一つには、スミスの富の源泉としての労働一般の把握は、一方できわめて古くからある労働一般の表象と共通性をもっているが、他方では近代人としてのスミスの立場が反映されているということである。富の源泉としての労働一般という労働の表象は確かに古い。例えば、ヘシオドスにはつぎのような記述が見出される。「お前は都度、仕事を喜んできちんと果すように。／そうすればお前の納屋は、節季には〔来年の〕食糧でいっぱいになるだろう。／仕事によってひとは羊群も殖えれば、裕福にもなる」〔12〕、19頁、〔本来は／印のところで改行〕。ここでヘシオドスは、仕事つまり無規定的な労働一般が富裕の源泉だととらえている。また、『聖書』の申命記には、モーゼがイスラエル人たちに「あなたは心のうちに『自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た』といってはならない」〔13〕、259頁と説いたことが記されているが、これは逆にみれば、人間の手の働きつまり労働が富の源泉であるという觀念が広まっていたことを示すものである。このような古代から存在する富の源泉としての労働一般の表象とスミスの労働一般の把握との間には、明らかに共通性がみられる。しかし、スミスの「分業としての労働一般」把握には、近代人としての彼の立場が反映されている。というのは第一に、人間の本来的な同等性が前提されてこの労働一般が説かれているからである。スミスによれば、「さまざまな人の生得の才能の差異というものは、われわれが気づいているよりも実ははるかに小さいのであり、さまざまな職業にたずさわる人が成年に達すると天分に非常な差異があつていかにも他をひきはなしているように思われ

るが、多くの場合それは分業の原因というよりその結果なのである」(121頁)。スミスの「分業としての労働一般」把握の基礎には、人間の本来的な同等性の把握が存在しているのである。また第二に、どの産業部門の労働も労働者が自由に移動し選択しうるという点で同等性をもつことが前提されているからである。「狩猟民や牧羊民の種族のなかで、ある特定の者が他の誰よりも手ばやく巧妙に弓矢をつくるとする。彼はしばしばその弓矢を仲間の牛や鹿肉と交換し、こうしてついには、このやり方のほうが自分が野に出てそれらを捕えるよりいっそう多くの牛や鹿肉を獲得できることに気づく。そこで、自分自身の利益にたいする顧慮から、弓矢づくりがしだいに彼の主要な仕事となり、彼は一種の武器製造人となる。もう一人は、自分たちの小さな小屋または移動家屋の骨組や屋根の製作に秀でている。彼はこの方面でよくその隣人たちの役にたち、隣人たちは同じようにして彼に牛や鹿肉を報酬として与え、そしてついには、この仕事に献身するのが自分の利益であることに気づき、一種の家大工となる。同じようにして、第三の者はかじ屋か真ちゅう細工人となり、第四の者は野蛮人の衣服の主要部分である生皮またはなめし皮のなめし屋か仕上屋になる」(120頁)。スミスはこのようにして分業の発生を説くのであるが、ここではすでに、種々の産業部門の労働は自分の利益を顧慮して労働者が自由に移動し選択しうるという点で同等性をもっていることが前提されている。このような労働と労働者の存在はブルジョア社会の産物であるが、彼はそのような状態を前提においたうえで「分業としての労働一般」を説いたのである。このように、スミスの労働一般把握には、古代からある表象との共通性ととともに彼の時代の反映がみられるのである。

さて二つには、彼が富の源泉を労働一般に求め、自然的素材を無視しているのは、近代思想の流れのなかでは特異なことではないが、しかしそれは、学説史上の後退を一面で含んでいるということである。古代的な表象を別としても、近代にあっては、富の源泉をもっぱら労働に求める考え方はかなり有力な潮流をなしていたと思われる。例えば、オップズは「豊かさは(神の好意にっ
いでは)まったく人々の労働・勤労に依存している」([5], 145頁)と述べているし、ロックも「自然と土地とは、それ自体としてはほとんど無価値な素材

を供与するにすぎない」(〔6〕, 49頁)として所有権の基礎を労働に求めている。このような近代思想の流れからいえば、スミスが素材的富の源泉を労働一般に求めたことは決して奇異なことではない。しかし、経済学説としては、ペティが「土地が富の母であるように、労働は富の父であり、その能動的要素である」(〔2〕, 119頁)ことを明確に把握していた以上、スミスの把握はやはり後退を含んでいるといわねばならない。

三つには、彼が素材的富の源泉を労働に求めたことは、価値論との関連を考えるならば進歩の側面をもっているということである。第一にこれは、特定の流通または生産の部面と結びついていた、以前の富を形成する労働の狭い把握から彼が脱脚したことを意味しており、価値形成労働を農業労働といった特定の労働の形態から切り離して労働一般に帰着させる思想の基礎となっている。例えば、重商主義者は、「必ずしも常に富すなわち貨幣と考えていたわけではなかった」(〔15〕, 60頁)にせよ、主要には貨幣の形態で富をとらえ、重農主義者たちは、商品形態にある土地生産物を富をとらえた。だがスミスにあっては、労働生産物が富の一般的形態である。そしてその富は、労働一般によって形成される。この把握は具体的有用労働の把握としては不完全であるが、しかし、そのような労働一般を把握したからこそ、労働生産物の交換価値・価値を問題にする場合、価値形成労働・価値尺度としての労働を特定の枠に制約されない労働一般としてとらえることができたのだといえるのである。第二にこれは、価値の尺度を純粹に労働に帰着させるうえでの基礎ともなっている。富の源泉を土地と労働に求めたペティの場合には、価値の尺度も二重的になり、結局「二つの価値尺度、労働と自然とが存在することになった」(〔21〕, 130頁)。しかしスミスの場合には、富の源泉を労働一般に求め、自然的素材を無視してしまったから、ペティのような価値尺度における混乱は生じなかったのである。

第三、価値形成労働・抽象的人間労働との対比におけるスミスの具体的有用労働の特質については、つぎのことが指摘されうる。すなわち、素材的富の源泉としての労働一般は価値形成労働・価値尺度としての労働と共通の性格をもつということがそれである。すでにみたように、彼の諸使用価値の源泉としての労働一般は、無規定・無差別の労働一般であり、特定の使用価値と直接の

結びつきをもっていない。したがって、それ自体としては価値形成労働と区別される特質を何らもっていないだけでなく、むしろ無規定的な労働一般として価値形成労働的な性格をもっているのである。具体的有用労働を抽象的人間労働的な一般性においてとらえたこと、ここにスミスの、また古典派経済学の具体的有用労働把握の特質が存するのである。

(注)

- (1) この問題は、これまでほとんど研究対象とされていない。また、この点に関するマルクスの指摘も(注(4)参照)、“ $v+m$ のドグマ”との関連を別とすれば、あまり注目されていないように思われる。もちろん無視されているのではないが(例えば、時永淑氏の研究〔〔18〕, 279頁,〔19〕, 172, 179頁等参照〕など)、その含意についてはより研究を深める余地が残されていると思われる。
- (2) ここでは、具体的有用労働というカテゴリーはサービス労働にも適用されるものとして論じている。しかし、具体的有用労働と物的な使用価値を形成する労働とを同一視するような誤解が存在していないともかぎらないし、これはかつて安部隆一氏が使用価値の歴史性についての主張にさいして提起された「使用価値=物」論とも関連するものであるから、念のためこの点について一言しておく。

第一に、マルクスの使用価値という用語は必ずしも物的財貨と同義ではないのであり、使用価値形成労働をつねに物的財貨をつくりだす労働であると考えてはならない。確かに彼は、「商品体そのものが使用価値または財である」(〔10〕, 48頁)と述べており、一般的には物的財貨と使用価値とを等置している。そして本稿でこの語を用いるときは、この一般的用語法に従っているのである。だが彼は、ときに非物質的な単なる効用という意味でもこの語を用いている。例えば、弁護士・牧師・政治家等々の「サービスは、このようなサービスとして使用価値をもつ」(〔9〕, 182頁)といった表現もみられるのである。したがって、使用価値を物的財貨とつねに同義であると考えてはならない。したがってまた、使用価値形成労働をつねに物的財貨をつくりだす労働だと考えてはならないのである。

第二に、マルクスはけっして、具体的有用労働と物的な使用価値を形成する労働とを等置してはいない。「すべての労働は、他面では、特殊な目的を規定された形態で人間労働力の支出であり、この具体的有用労働という属性においてそれは使用価値を形成する」(〔10〕, 63頁)。ここでの使用価値が商品体・財と同義であることは前後関係からいって明らかであるが、これが具体的有用労働は使用価値形成労働であるという等置関係の規定となっていない点に注意しなければならない。マルクスは、具体的有用労働という「属性において」物的な使用価値を形成すると述べているのであり、ここから類推して、具体的有用労働という「属

性において非物質的な使用価値を形成するといいかえることは何ら差支えないのである。

このようなことからして、具体的な有用労働というカテゴリーをサービス労働にも適用して論ずることは適切だといえる。

- (3) このような具体的有用労働の一般的な把握という点は、リカードによっても克服されなかった。労働が特殊なものであるという表象は日常的な観念として存在している。しかし私のみとところでは、労働の特殊性と合目的性を明確に把握したのは、おそらくヘーゲルをもって嚆矢とする。「もろもろの特殊化された欲求を満たすのに適した、同じく特殊化された手段を作製し獲得する媒介作用が労働である。労働は自然によって直接に提供された材料を、これらの多様な目的のためにきわめて多種多様な過程を通して種別化する。だからこの形成は、手段に価値と合目的性を与える」(〔7〕, 427—428頁)。
- (4) この点については、マルクスのつぎのような指摘がある。「アダム・スミスは、労働一般が、素材の富つまり諸使用価値の唯一の源泉であると宣言した。そのさい彼は自然的要素をまったく見すごしたものだから、彼はもっぱら社会的富の、交換価値の領域に追いこまれることとなった」(〔8〕, 93—44頁)。また彼は、『諸国民の富』の冒頭の一節を引用し、「そのさい彼が忘れてるのは、こういうことは何年も前から伝えられた、労働手段や労働対象の助けがなければ不可能だったということである」(〔11〕, 464頁)と述べている。
- (5) フランスにおける古典派最後の人シスモンディは、「われわれは、アダム・スミスとともに、労働は富の唯一の源泉であり、節約は富の蓄積の唯一の方法であると主張する」(〔4〕, 78頁)とスミスをまったく踏襲している。しかしリカードは違う。彼は、スミスが製造業では自然はなにもしないと述べたことにたいして、「自然が人間に援助を与えることのない、しかも惜しみなく無償で与えることのないような製造業を、一つも挙げることはできない」(〔3〕, 90頁)と批判するとともに、価値と富、価値と使用価値を峻別し、「自然力は、たとえ一商品に使用価値を大いに付加するとはいえ、……交換価値を付加することはない」(同, 329頁)と述べている。このようにリカードは、使用価値の形成に自然力の作用を認め、交換価値・価値の形成要因としては自然力を意識的に捨象している点において、スミスより進歩しているのであり、労働の二重性把握を深化させているのである。

二、スミスの抽象的人間労働把握

つぎに、スミスの抽象的人間労働把握について検討しなければならない。具体的有用労働の場合と同じく、この問題についても、(一)、彼の抽象的人間労働把握の到達点、その接近度と限界について、(二)、先行者の学説・思想との対比

における彼の把握の位置と意義について、(三)、スミスの使用価値形成労働・富の源泉としての労働との対比における価値形成労働・価値尺度としての労働の特質について、の三点にわけて論ずることにする。

第一に、スミスの到達点についてであるが、この点については、彼は抽象的人間労働の把握にかなり接近してはいるものの、やはりその完全な把握には到達しえなかったといわねばならない。

彼が抽象的人間労働の把握にかなり接近していることは確かである。なぜなら、第一に、彼は使用価値と交換価値とを分離し、「それが加えられる対象の価値を増加させる」(Ⅱ, 337頁)・「価値を生産する」(同頁)・「自分が加工する材料の価値に、自分自身の生活維持費の価値と、自分の親方の利潤の価値とを付加する」(同頁)・「ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりする」(同, 337—338頁)ような生産的労働と「有用労働」とを一応区別しているからである。つまり、有用な物あるいは効果をつくりだす労働と価値を形成する労働とを一応は区別しているからである。また第二に、労働の量は特定商品の量とは区別される「抽象的な観念」であることを一応ふまえているからである。「その交換価値を評価するには、それが購買しうるある他の商品によるほうが、それが購買しうる労働の量によるよりもいっそう自然である。それに、大部分の人々もまた、特定商品の量というほうが、労働の量というよりもいっそうよくその意味を理解する。前者は目に見え、触知しうる物体であるが、後者は抽象的な観念であって、たとえ充分理解しうるものにするにはできないにしても、総じて前者ほど自然ではなく、また自明なものでもない」(153—154頁)。みられるように、これは支配労働価値説に関連して述べられたものであり、その点で限界をもっている⁽¹⁾。しかし、価値尺度としての労働を商品の物的な異質性を捨象した形でとらえ、その抽象性を彼はある程度把握しているのである。そして第三には、「労苦や煩勞」(151頁)・「自分の安楽・自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならぬ」(156頁)という点での同質性・同性等という制限された形態ではあるが、彼が価値を付加・固定し、価値の尺度となる労働の同質性・同性等をとらえているからである。「貨幣または財貨で買われるものは、われわ

れが自分自身の肉体を労苦させることによって獲得できるのとちょうど同じだけの労働によって購買されるのである」(151頁)。このような把握に関するかぎり、スミスは、具体的有用的形態を捨象された・互いに無差別な人間労働という抽象的人間労働の把握にかなり接近しているといえる。

しかし、厳密にみるならば、やはりスミスは抽象的人間労働を把握しきれていない。というのは、彼は労働の支出を「ただ安楽や自由や幸福の犠牲と考えているだけ」(〔10〕, 63頁)であり、「商品の価値に表わされるかぎりでは、労働はただ労働力の支出として認められるだけだということを予感している」(同頁)にとどまったからである。また、異なる労働の同等性を自由や幸福の犠牲の同等性に求め、「社会的過程が等しくない労働の間でなしとげる客観的均等化を、個人的労働の主観的同権化と誤認している」(〔8〕, 44頁)からである。さらにまた、使用価値形成労働からの価値形成労働の分離を明文と明瞭な意識性をもってはなしえなかったからである。

このようにスミスは、たんなる人間の脳・筋肉等々の支出として同等な人間労働を把握せず、自由や幸福の犠牲の同等性として労働の同等性を主観的にとらえ、使用価値形成労働から価値形成労働を意識的には分離しえなかったのであるから、厳密な意味では彼が抽象的人間労働を把握したとはいえないのである。

第二の、スミスの思想史・学説史的な位置と意義については、つぎの点を指摘しておきたい。

一つは、彼の価値形成労働把握の基礎にある辛い労働という労働の表象はきわめて古くからあり、彼の把握にはこの古くからの労働の表象とプロレタリアートの労働の表象とが重なりあっているという点である。辛い労働という表象はきわめて古い。例えば、あれほど労働を賛美したヘシオドスすら、「むかし人間の種族は禍いや辛い労働をゆめにも知らず……地上に生きていた」(〔12〕, 9頁)と述べている。また、『聖書』の創世紀におけるアダムへの神の言葉、「あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。……あなたは顔に汗してパンを食べ、そして土に帰る」(〔13〕, 4頁)という言葉を想起することもできる。さらに、伝道の書における「神はすべての人に 富と 宝とそれを楽しむ 力を与

え、またその分をとらせ、その労苦によって楽しみを得させられる」(同、926頁)という規定などは、神から与えられるという観念がスミスの場合明示的ではないとはいえ、労苦と富や宝の量とを対応させている点で、スミスの「労働こそは、最初の貨幣、世界のいっさいの物に支払われた本源的な購買貨幣であった」(151頁)・「労働の生産物は、労働の自然的報酬または自然的賃金を構成する」(219頁)という把握と酷似している。辛い労働・自由や幸福の犠牲としての労働という労働の表象は、使用価値形成労働に関するものとしては、このように古いのである。マルクスがいうように、「彼が念頭においていたのは近代的賃労働者である」(〔10〕、63頁)が、スミスの把握には眼前にある労働の表象ときわめて古くからある労働の表象とが重なりあっていったといってもよからう。

二つには、使用価値形成労働としてはきわめて古くからある辛い労働という表象を、価値尺度としての労働の規定に転用したところにスミスの画期性が見出されるという点である。彼は、自由や幸福の犠牲としての労働の量を考え、それを労働の価値と労働時間に対応させ、価値尺度としての労働の規定を創出した。彼の価値尺度論の背後にある労働の表象はきわめて古くから存在するのであるが、しかし、彼がそのような表象を転用し、リカードの価値尺度論の基礎ともなった価値尺度としての労働の規定をつくりだしたことは、価値学説の歴史において画期をなすものであったといえるのである⁽²⁾。

第三に、彼の価値形成労働・価値尺度としての労働を、彼の使用価値形成労働・富の源泉としての労働と対比してみると、そこにつぎのような特質がうかがいがってくる。すなわち、彼の価値尺度としての労働は、諸使用価値の源泉としての労働一般と区別される特質をもたず、本質的には同一だということがそれである。さきに述べたように、彼の価値尺度としての労働の基礎にある辛い労働という表象は、元来はきわめて古くからある使用価値形成労働一般の表象なのであり、彼はそれを転用したのである。また、彼自身、「あらゆる物の実質価格、つまりあらゆる物がそれを獲得しようと欲する人に現実についてやさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞である」(151頁)と述べ、物つまり使用価値形成労働を実質価格の規定にさいしてもちだしているのである。

結局スミスにあっては、価値形成労働・価値尺度としての労働は、諸使用価値の源泉としての労働一般と区別される特徴をもっていない。また、どちらの労働も「労苦や煩勞」であり、特殊な使用価値と結びつきをもたない労働一般であるから、両者は本質的には同一の労働なのである。

(注)

- (1) ここで限界をもっていると述べたのは、支配労働価値説の場合、支配しうる労働ということで考えられている労働は、他人の使用価値形成労働・素材的富の源泉としての労働であり、その点で労働の具体的有用的形態の捨象ということが徹底されていないからである。スミスの場合、交換によって手にする富の量を問題にするがゆえに支配労働価値説が現われてくるので、彼の支配労働の把握にはこのような限界が存在するのである。これらの点は、別の機会に詳論するつもりである。
- (2) スミスの価値論と、トマス・アクィナスらの寺院法学者やロックらの自然法学者の所説との関連については、かなり研究が蓄積されている(例えば、[14], 121頁, [22], 380頁, [23], 2-18頁等参照)。しかし、この古くからある労働の表象をスミスが転用したことについては、これまで研究されていないように思われる。なお、『貨幣の利子一般、および特に公債の利子についての若干の考察』という18世紀中頃のパンフレットの著者もまた、投下労働時間による価値規定にさいして労苦の量をもちだしている。しかし彼は、「ある人はこの生活必需品を生産するのに一週間かかったのであり、彼の苦痛(Pains)は彼をちょうど一週間養うだけのものに値する」([24], p. 39, 訳は基本的に[16], 191, 366頁に依拠)といったことを断片的に述べただけで、スミスのように明示的・体系的には「労苦と煩勞」の量を価値規定に結びつけてはいない。それがゆえに、彼の投下労働時間による価値規定はスミスよりも鮮明な形で打ちだされており、その点がこのパンフレットを発見したマルクスによって評価されることになったのである。マルクスは、このパンフレットの引用にさいして労苦に言及した箇所を省略しているのであるが、この匿名の著者の投下労働価値説の背後にも労苦の量という把握がひそんでいたことは興味深い。

三、スミスの労働の二重性把握と彼の理論体系にたいするその影響

以上の考察をふまえるならば、スミスの労働の二重性把握の独得の構造、到達点がどのようなものであったかは、おのずから明らかであろう。

スミスは、具体的有用労働をある程度把握していたし、抽象的人間労働の把握にもかなり接近している。しかし、厳密にみるならば彼は具体的有用労働も

抽象的人間労働も完全には把握しきれなかった。彼は、価値尺度としての労働の規定にさいして労働の特殊性・具体性を無意識的に捨象していたのであるが、抽象的人間労働を発見することはできなかったのである。彼は労働の二重性を明確には区別しえなかったのであり、その区別はあくまで「事実上」の区別にとどまったのである。また、彼の把握にはきわめて古くからある労働の表象と密接な関連をもつ独得の構造が存在している。すなわち、スミスにあっては、価値形成労働・価値尺度としての労働と諸使用価値・素材的富の源泉としての労働とは、特殊な使用価値と直接の結びつきをもたない・自由や幸福の犠牲である労働一般として本質的に同一であり、この本質的には同一の労働一般が、使用価値に関連して問題とされるか交換価値に関連して問題とされるかによって、そこに事実上の区別が現われるのである。これがスミスの労働の二重性把握の構造的特質であり秘密である。

では、なぜスミスは労働の二重性を明瞭に分離できなかったのであろうか。その最大の原因は彼が労働の特殊性を明確に把握しえなかった点に求めることができる。彼は具体的有用労働の特殊性をとらえられず、それを一般的に把握した。したがって彼にあっては、使用価値を形成する特殊な労働と価値を形成する一般的な労働とを区別しなければならないという論理的要請は発生せず、労働の二重性を明瞭には分離しえなかったのである。

スミスの労働の二重性把握の到達点はこのようなものであった⁽¹⁾。そしてこのような把握は、彼の価値理論さらには彼の経済学体系を大きく制約するものであった。その関連の全体像を論ずることはここではできない。しかし、例示としてつぎの点についてだけ一言しておこうと思う。それは、スミスの労働の二重性把握と彼の生産的労働把握の結びつきについてである。

スミスの生産的労働の規定では、周知のように、素材的富・使用価値をつくる労働と価値を形成する労働とは一体であり、労働過程論的な立場からの規定と価値形成・増殖過程の立場からの規定とは分離されていない。彼にあっては、生産的労働とは、一方では、「年々の生産物は……生産的労働の成果である」(Ⅱ, 340頁)という規定にみられるように、素材的富・使用価値をつくる労働である。また他方では、「価値を形成する労働」(同, 337頁)でもあり、

しかも単なる価値形成労働であるばかりでなく、「自分の親方の利潤の価値を付加する」(同頁)ような資本をつくる労働でもある。そして、このような生産的労働の種々の規定をスミスは分離していないのである。スミスの生産的労働についての全体的考察は別の機会を待たねばならないが、しかし、このような彼の生産的労働把握の混乱が彼の労働の二重性把握と密接な関連をもっていることは確認することができる。彼は労働の二重性を区別できなかったから、素材的富・使用価値をつくる労働は同時に価値を形成する労働でもあるととらえた。そのことが使用価値形成労働としての生産的労働の本源的規定と価値形成労働としての生産的労働の歴史的規定とを分離しえなかった一つの原因となったことは、容易に類推できるのである。

このような生産的労働把握の問題はほんの一例にすぎない。このような例にもみられるように、スミスの労働の二重性把握の限界と特質は、彼の理論体系のさまざまな箇所でも混乱を生む一源泉となっているのである。

(注)

- (1) ここで、抽象的人間労働と価値との内的必然的連関にふれなかったことについて異論がでるかも知れない。詳しいことは別の機会に述べることにするが、私自身は両者の間に内的必然的連関があるという理解には与していないので、スミス評価としては以上のようなことで充分であると考えている。

四、まとめに代えて

労働の二重性の発見史については、すでに示唆しておいたことであるが、大よそ、スミス——リカードおよびヘーゲル——マルクスという系列においてその概要をとらえることができる。その全体像の解明は今後の課題であるが、私は労働の二重性の発見史の研究が、古典派やマルクスの理解のためにも、経済理論の今日的発展のためにも必要であると考えてるのであり、ここではその基礎的な研究をおこなったのである。

《引用文献》

- 〔1〕 A・スミス『諸国民の富』I—V (大内・松川訳, 岩波文庫)。
〔2〕 W・ベティ『租税貢納論』(大内・松川訳, 岩波文庫)。

- [3] D・リカード『経済学および課税の原理』（リカード全集Ⅰ，掘訳，雄松堂書店，1972年）。
- [4] シスモンディ『経済学新原理』上・下（世界古典文庫139，管間訳，日本評論社，1949・50年）。
- [5] ホッブズ『リヴァイアサン』Ⅱ（水田訳，岩波文庫）。
- [6] ロック『市民政治論』（鶴飼訳，岩波文庫）。
- [7] ヘーゲル『法の哲学』（世界の名著第35巻所収，藤野・赤澤訳，中央公論社，1967年）。
- [8] マルクス『経済学批判』（M・E全集第13巻所収，杉本訳，大月書店，1964年）。
- [9] 同『剰余価値学説史』Ⅰ（M・E全集第26巻，大内・細川監訳，大月書店，1969年）。
- [10] 同『資本論』第一巻（M・E全集第23巻，大内・細川監訳，大月書店，1968年）。
- [11] 同『資本論』第二巻（M・E全集第24巻，大内・松川監訳，大月書店，1968年）。
- [12] ヘシオドス『仕事と日々』（世界人世論集Ⅰ所収，真方訳，筑摩書房，1963年）。
- [13] 『聖書』（日本聖書協会発行）。
- [14] 高島善哉『アダム・スミスの市民社会体系』（岩波書店，1974年）。
- [15] 出口勇三編『四訂・経済学史』（ミネルヴァ書房，1961年）。
- [16] 『小林昇経済学史著作集Ⅰ・国富論研究(1)』（未来社，1976年）。
- [17] 遊部久蔵『価値と価格』（青木書店，1948年）。
- [18] 時永淑『経済学史』下（法政大学出版局，1968年）。
- [19] 同『古典派経済学と資本論』（法政大学出版局，1982年）。
- [20] 頭川博「価値論の一基本問題」（一橋論叢第81巻第6号，1979年）。
- [21] ローゼンベルグ『経済学史』上（廣島・橋本訳，青木文庫）。
- [22] シュムペーター『経済分析の歴史』Ⅰ（東畑訳，岩波書店，1955年）。
- [23] L・ミーク『労働価値論史研究』（水田・宮本訳，日本評論社，1957年）。
- [24] *Some Thoughts on The Interest of Momey in General, and Particulary in the Publick Funds., The Second Edition, London.*

（筆者の住所：東京都府中市分梅町1-25-47）